第１６号

かさおか自慢子ども新聞

２０１６年（平成２８年）
３月５日（土）発　行

笠岡地区まちづくり協議会
文化部会　・　子ども新聞部

かさおかの小さなＳＬ

むかしはミニだった

今から四十四年前まで、市内を南北に井笠鉄道の線路が通り、その上を蒸気やディーゼルの機関車が走っていた。この鉄道のレールの幅は約七十六センチで、客車一両の長さは約九メートル。今の山陽本線のレールの幅は約百六センチで、長さは二十メートルもあるので、かなり小さな車体であった。

出入り口のドアの高さは今より低く約百六十センチで、背の高い人は気をつけないと頭を打ちそうだ。車内は向かい合わせのイスで背もたれのクッションはなく行儀よくすわらないと足が当たるほどせまい。

荷物を置く網棚も小さいので、大きな荷物は落ちそうで危ないと思った。

（六年　田中　宏樹）

車内の様子

とても大切な工夫

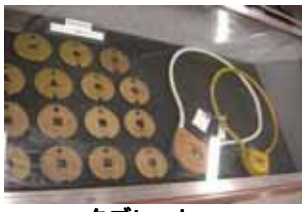
転車台というものがある。これは蒸気機関車の向きを変えるための台車だ。二メートル位の円の中に、レールが付いた台があり、この上に機関車を載せて動かす。人がハンドルを回して動かしていたそうで大変だなあと思った。

また、単線の鉄道で大事な役目をする**タブレット**というものがある。これは中央に穴が空けられていて、穴の形は、丸、三角、四角、楕円などがある。タブレットを運転士が駅長からもらうと次の駅までの通行手形になる。

他の列車との正面衝突や追突を防ぐために、駅と駅の間で種類の違うタブレットを使い分けて、列車を安全に運行させていた。

（五年　岡本　拓真）

転車台



タブレット

レールを走るバス？？

今はないけれど、むかし、ＪＲの笠岡駅には「四番ホーム」があった。井笠鉄道が走るためのホームだ。そこから、北に線路が伸びていた。敬業館の近くも通っていて、今登下校で毎日歩いている歩行者自転車道がむかし井笠鉄道が走っていた線路だった。

西の浜の交通公園に井笠鉄道の気動車が保存されていて、運転席が前と後ろの両方にある。どちらにも進めるなんて便利だなと思った。車両出入り口には階段があるのでバスみたいだ、前輪と後輪のあいだにディーゼルエンジンがあるので床が高くなっていたからだ。今のＪＲの電車は、何両かつないで走るので運転席は片方にしかない。電気のモーターで走るためエンジン部分が小さくなったので、車両の中に階段がなく広々としている。

新山の鉄道記念館の人は、「乗りごこちはよかったよ」と教えてくれた。小さな車内で、となりや向かいにすわった人と楽しく話をしながら乗っていたのかなあ。

（四年　森兼　慧）

百年前の大革命

始まりは、明治四十四年（今から百年前）にまでさかのぼる。井原笠岡軽便鉄道株式会社ができた。岡山県で最初に運転を始めた私鉄だ。

二年後の大正二年、井笠本線（笠岡から井原）が営業開始。大正十年、矢掛支線（北川から矢掛）が営業開始。大正十四年、高屋線（井原から高屋）が営業開始。

昭和十五年、路線が三七ｋｍに伸びる。これは笠岡から倉敷までくらいの距離と同じだ。このころはお客さんが年間百万人を超えていたそうだ。工場・学校・買い物・大仙院、などに通う人を客車にのせ、農作物を貨車にのせた井笠鉄道。笠岡やその周りに住む人にとって、とても便利な乗り物だった。

昭和四十年代からは、車を持つ人が増えて、お客さんは減っていった。

昭和四十六年（一九七一年）三月三十一日、井笠鉄道は営業を終えた。つまり、六十年にわたって井笠鉄道は走っていたのだ。

（六年　森兼　惇）